

衡平性の認知と社会的ネットワーク

諸井克英

問題

対人関係への衡平理論の適用

Walster, Walster, & Berscheid (1978-b) は、Adams (1965) によって提起された衡平理論を対人関係上の諸領域に適用するために、理論的体系化を試みた。その際、彼らは、次の基本的命題を提起した。

命題 I：人は、自己のアウトカム（アウトカム＝報酬－コスト）を最大にしようと試みるだろう。

命題 II-A：集団は、成員間で資源を衡平に分配するための認められたシステムを発展させることによって、集団報酬を最大にすることができる。したがって、集団は、そのような衡平システムを発展させ、成員がこれらのシステムを認めシステムに従うように誘導するだろう。

命題 II-B：一般に、集団は、他者を衡平に扱う成員に報酬を与え、他者を不衡平に扱う成員に罰を加えるだろう。

命題 III：自分自身が不衡平な関係に関与していることに気づくと、人は苦悩（distress）を感じるだろう。その関係が不衡平であるほど、その人が感じる苦悩も大きくなるだろう。

命題 IV：自分自身が不衡平な関係にあることに気づいた人は、衡平回復によって、苦悩を除去しようと試みるだろう。存在する不衡平が大きいほど、その人が感じる苦悩は大きく、その人はより懸命に衡平回復を試みるだろう。

Walster *et al.* (1978-b) は、Adams (1965) と異なり、利得最大原理から出発する（命題 I）。しかし、彼らによれば、資源が有限であるかぎり、この“個人的利益”の追求は個人間の争いを引き起こし、“全体的利益”という観点から、衡平規範の社会的形成と個人における内在化が生じる（命題 II-A,B）。こ

の内在化の結果についての命題(Ⅲ,Ⅳ)は、Adams(1965)が提起した衡平理論と同一である。

命題Ⅲのみに従えば、親密な関係においても、当事者による衡平性の認知と情動的状态との間には、2者の関係が衡平であると認知している衡平利得者の苦悩が最も低く、自己の相対的利得が過大である過大利得者および過小である過小利得者の苦悩が高くなるという、2次の関数関係が予測される。Adams(1965)は、不衡平の閾値が過小利得よりも過大利得の場合に高いことを認めている。これは、衡平原理と利得最大原理との調和によって説明される。すなわち、命題Ⅲとともに命題Ⅰも考慮に入れると、過大利得者の苦悩が過小利得者のそれよりも少し低くなるという、1次と2次の合成された関係が導かれる。

恋愛・夫婦関係への衡平理論の適用を検討した先行諸研究では、1) 衡平利得者の情動的状态が最もポジティブである、2) 過大利得者よりも過小利得者のほうの情動的状态が少しネガティブである、という傾向が見出されている(諸井・小川,1987 参照)。わが国でも、井上(1985)が男女大学生の恋愛関係について検討し、衡平よりもむしろ少し過大利得の方向にずれている者が最もポジティブな情動的状态にあることを認めた。

ところで、Homans(1974)によれば、怒りが過小利得者、罪責感が過大利得者、満足感が衡平利得者の気分の特徴である。従来の研究では、自他のインプットとアウトカムを思い浮べたときの4つの気分評定(怒り、罪責感、満足感、幸福感)の合成得点であるTMI(満足感+幸福感-怒り-罪責感)が苦悩の指標としてよく用いられている。しかし、諸井(1989)は、衡平性の認知に伴う情動が満足感、怒り、および罪責感の3次元から成ることを因子分析によって明らかにしている。さらに、諸井(1989)は、衡平性の認知と情動的状态との関係についても、衡平性の認知に伴う情動の3次元性に基づき、次のように精緻化している。

仮説Ⅰ： 満足感は衡平利得者の特徴であり、2者の関係が不衡平であると認知するほど満足感が低下する。

仮説Ⅱ： 怒りは、過小利得者の特徴である。

仮説Ⅲ： 罪責感は、過大利得者の特徴である。

親友との関係における衡平性

Walster *et al.* (1978-b)は、親密な関係を親友関係、恋愛・夫婦関係、および親子関係の3水準に分けて、衡平理論の適用可能性を論じている。したがって、親友という水準での関係における衡平性の認知と情動的状态について検討

することも重要であろう。諸井・小川（1987）や諸井（1989）は、大学生や専門学校生の親友関係について検討を加えた。これらの研究では、親友とは“最も親しい友だち”とされた。

女子大学生の同性および異性親友とのそれぞれの関係について交際期間の効果を含めて検討した研究では（諸井・小川，1987），次の結果が見出された。同性親友との関係では、怒りと罪責感とで衡平理論と一致する傾向があった。異性親友との関係では、交際期間が長期の場合に罪責感で、交際期間が短期の場合に満足感で衡平理論と一致する傾向があった。

諸井（1989）は、男女大学生と専門学校女子学生を対象とし、同性親友との関係における衡平性の認知と情動の状態との関係について検討した。その際、2者の関係進展度（交際期間、関係の親密さイメージ）の影響を含めて検討し、次の傾向を認めた。大学—男子では、衡平仮説と一致して過大利得者の罪責感が関係進展の初期段階で生じるが、2者関係の安定性については関係が進んだ段階で衡平原理が適用される。しかし、2者が一体化していない段階での衡平状態はむしろ怒りを引き起こす。大学—女子では、一般的に、関係進展の初期段階で衡平原理が適用されるといえる。専門—女子については、愛情度において関係が進んだ段階で衡平原理が適用されることを示す傾向が得られた。

諸井（1989）は、大学生で顕著にみられた性差について、男女の志向性の差異によって解釈した。男子は、課題志向的であり、衡平な同性友人関係の確立を目標とする。したがって、関係が進展した段階での衡平状態からの逸脱はネガティブな情動を引き起こしやすい。一方、女子は、人間関係志向的であり、交換原理によって支配されない同性友人関係を理想とする。そのため、関係が進展するほど衡平性の認知と情動との関係が希薄になる。また、専門—女子では、関係の進展段階に関する効果があまり検出されなかったが、これは、大学生に比べ、交際期間が長く親密さイメージが肯定的であり、対象とした友だちの水準が異なるためと解釈された。

一方、1) 大学生での好意度、2) 専門—女子の低親密イメージ群での愛情度で、利得最大原理と一致する傾向があった。

ところで、諸井（1989）によれば、夫婦・恋愛関係が閉鎖的關係として特徴づけられるのに対して、親友関係は複数の関係を伴う。したがって、親友関係における衡平性の認知と情動の状態との関係を検討する際には、“世界に対する衡平性 (equity with the world)” 仮説に代表される社会的ネットワークの視点を導入する必要があるだろう。

世界に対する衡平性

Austin & Walster (1974, 1975) によれば、伝統的衡平理論では、特定の関係における衡平性が扱われており、特定の関係で経験された不衡平が他の関係での行動に影響しないことが前提とされている。彼らは、特定の関係に限定された衡平性を人物固有の衡平性 (person-specific equity) と呼んだ。一方、彼らは、人には当該の時間範囲内での自己の関係全体において衡平を維持しようとする傾向があることを指摘した。つまり、その人が営む複数の関係間で全体として帳尻を合わせることによって、自己の衡平を維持しようとするのである。彼らは、これを世界に対する衡平性と呼んだ。

さらに、Austin & Walster (1974, 1975) は、人が人物固有の衡平性と世界に対する衡平性の両方を達成しようと試みると仮定した。しかし、特定人物との関係での衡平回復が困難であるときには、世界に対する衡平性の維持が優先される。つまり、人物固有の衡平性の回復が犠牲にされる。その際、1) 関係している人物間の類似性、2) 特定人物との衡平回復のコスト、3) 新たに不衡平状態におかれる人物の予想される反応 (報復, 困惑) が世界に対する衡平性の維持のための行動に影響を与える。

世界に対する衡平性仮説を検証するために、Austin & Walster (1974, 1975) は、報酬分配事態を用いて2つの実験を行い、次の知見を得た。

- 1) 人物Aとの関係で過小利得状態におかれた者は、別の人物Bとの関係で、人物Bとの関係における衡平性 (人物固有の衡平性) を犠牲にして、世界に対する衡平性を回復する。人物Bとの将来の相互作用の可能性が顕在化すると、この傾向は生じない (Austin & Walster, 1975)。
- 2) 別の人物Bによって不衡平状態におかれた人物Aが、その後世界に対する衡平性を確立するような仕方でも自分に対して不衡平に振るまったときには、人物Aに対する否定的反応は生じない (Austin & Walster, 1974)。

先述したように、複数の関係が複雑に絡み合う友人関係においては、人物固有の衡平性に加えて、当該の人が営む友人関係全体での衡平性、すなわち世界に対する衡平性に関する配慮も存在すると考えられる。たとえば、特定の友だちとの関係では過小利得を感じたとしても、他の友だちとの関係を自己にとって過大利得な状態にすることによって、全体的な帳尻を合わせようとするかもしれない。

ところで、Walster, Traupmann, & Walster (1978-a) は、同棲・結婚生活での過小利得者が、配偶者に対し性行動の点でのより大きな譲歩を期待し、結婚

外の性交渉を営む傾向が強くなると予測した。彼らは、この予測を支持する結果を得たが、この結果を世界に対する衡平性仮説によって解釈している。つまり、配偶者との関係によって生じた不衡平を、配偶者以外の人物との関係も含めることによって、解消していると考えられるからである。これは、本来は閉鎖的関係である夫婦・恋愛関係においても世界に対する衡平性への配慮が存在することを示している。

Austin & Walster (1974, 1975) は、もともと不衡平をもたらした人物と世界に対する衡平性の回復行動の対象となる人物との間に相互作用が存在することがどのような影響を生じるかについて、言及していない。対象人物の間にも相互の関係があるほうが、特定人物との間の衡平性があまり顕在化せず、人物固有の衡平性を犠牲にしやすいだろう。したがって、自己の友人関係全体と自己との間での衡平性、すなわち世界に対する衡平性への配慮が容易になると考えられる。しかし、Walster *et al.* (1978-a) が扱った関係では、当然ながら、配偶者と婚外の相手との間に相互作用がない場合に、世界に対する衡平性の回復行動が生じやすいといえる。これは、結婚関係では婚外の情事に対する否定的規範が存在するためである。

本研究の目的

本研究では、友人関係における衡平性の認知と情動的状态との関係について、Austin & Walster (1974, 1975) が提起した世界に対する衡平性の観点から検討を加える。

まず、自分が営む友人関係に含まれる当該の友だちと他の友だちとの間の関係の有無の影響を検討する。当該の友だちが他の友だちともつきあいをもっているほど、当該の友だちと自己との関係における衡平性の認知と情動的状态との関係が曖昧になると予測される。つまり、当該の友だちとの関係だけで衡平性を考慮するよりも、複数の友だち全体と自己との間で衡平性を考慮している可能性が強いからである。

次に、自分が営む友人関係全体と自己との間での衡平性の認知と情動的状态の関係について検討する。友だち同士の間につきあいがあるほど、つまり関係密度が高いほど、人物固有の衡平性を犠牲にしやすい、友人関係全体を一体のものとして考慮しやすいと考えられる。したがって、友人関係の関係密度が高いほど、友人関係全体と自己との間での衡平性の認知と情動的状态との関係が、衡平理論と一致すると予測される。

本研究では、社会的ネットワークの観点からの検討の他に、1) 衡平性の認知

に伴う情動の3次元性、および2) 衡平性と平等性の重複(諸井・小川, 1987; 諸井, 1989), の問題について再度検討を加える。

方法

調査対象および調査の実施

国立大学の教養部で“心理学”を受講している1, 2年生を対象に調査を実施した。調査は, “友だち同士の間でのやりとり”に関する基礎的データ収集のための調査であるとして, 1987年1月下旬に行った。

大学生では, 回答方法に誤りのあった者を除く148名を分析対象とした(男子66名, 女子82名)。

質問紙の構成

質問紙は, 全体的教示, 被験者の個別的な友人関係に関する質問群, および被験者の友人関係全体に関する質問群から構成されている。

1. 個別的な友人関係

(1) 友だちのリスト・アップ

“親しくつきあっている友だち”の人数を, 同性, 異性に分けて記入させた。次に, 最も親しくつきあっている友だち5人(同性, 異性を含め)を選ばせ, 親しい順に, A, B, C, D, Eとさせ, それぞれの友だちのイニシャルを記入させた。親しい友だちが5人以内のときには, Aから記入させ, 残りの箇所に×印を記入させた。さらに, それぞれの友だちについて, 交際期間と関係の親密さイメージを尋ねた。親密さイメージについては, 諸井(1989)と同様に, 2つの円が完全に交わっている段階(5)から完全に分離している段階(1)までの5段階の図を呈示し, 2つの円の一方を自分, 他方を相手として, 2者の関係のイメージに最も近いものを選択させた。

(2) 友だち相互の関係

AからEまでの友だち相互の関係について, マトリックス表に記入させた。当該の2人がつきあっている場合には○印を, つきあっていない場合には×印を記入させた。

(3) 衡平性の認知と情動の状態

被験者とAからEまでとのそれぞれの関係について, 衡平性の査定と衡平性の認知に伴う情動に関する尺度を評定させた。

1) 衡平性の査定尺度: 自分と相手との関係を維持する上でのそれぞれの貢

献（インプット），および両者の関係からそれぞれが得ているもの（アウトカム）について“+4”から“-4”までの8点尺度で評定させた。“かなり貢献している”，“かなり得ている”を“+4”とし，“ほとんど貢献していない”，“ほとんど得ていない”を“-4”とした。

2) 衡平性の認知に伴う情動に関する尺度： 両者のインプットおよびアウトカムについて考えたときの気分について，“かなり感じる”を“5”とし，“ほとんど感じない”を“1”とする5点尺度で評定させた。本研究では，“怒り”項目として，腹立たしさ，怒り，いらだたしさ，いきどおり，“罪責感”項目として，申し分けなさ，罪悪感，うしろめたさ，やましさ，“満足感”項目として，満足感，幸福感，喜び，楽しさ，を用いた。

2. 友人関係全体

まず，被験者の友人関係全体での親密さイメージについて，個別的な友人関係の場合と同様な方法で評定させた。次に，被験者と友人関係全体との関係における，衡平性の査定と衡平性の認知に伴う情動に関する尺度を評定させた。

なお，衡平性の認知に伴う情動に関する尺度では，項目の順序効果をなくすために，項目順序の異なる6つのタイプの尺度を作成し，AからEまでの5評定および友人関係全体での評定において，同じ項目順序を用いないように配慮した。

不衡平値の算出

先行研究と同様に（諸井・小川，1987；諸井，1989），個別の関係および友人関係全体についての自他のインプットとアウトカムの査定値に基づき，以下に示す Walster, Walster, & Traupmann (1978-c) と同じ方法を用いて，不衡平値を算出した。

$$\bar{X}_p = I_p + \frac{|I_p|^{K_p} \times (O_o - I_o)}{|I_o|^{K_o}} \quad \text{不衡平値} = \frac{O_p - \bar{X}_p}{|I_p|}$$

\bar{X}_p : 被験者にとって衡平なアウトカム値

O_p, I_p : 被験者自身のアウトカムとインプットの査定値

O_o, I_o : 相手のアウトカムとインプットに関する査定値

K_p, K_o : +1 か -1 のベキ指数

$$K_p = \text{sign}(I_p) \times \text{sign}(O_p - I_p) *$$

$$K_o = \text{sign}(I_o) \times \text{sign}(O_o - I_o)$$

*ただし，“ $O_o > I_o$ ならば $O_p > I_p$ であり， $O_o < I_o$ ならば $O_p < I_p$ であ

る”という仮定 (Walster *et al.*, 1978-b) に従って, $\text{sign}(O_p - I_p)$ は $\text{sign}(O_o - I_o)$ によって置き換える。

結 果

A. 友だちのリスト・アップ

被験者が“親しくつきあっている友だち”として挙げた人数の中央値は7.36であり(男子8.00, 女子7.08), うち同性の友だちが5.79(男子6.00, 女子5.70), 異性の友だちが1.47(男子1.50, 女子1.44)であった。いずれの場合も男女差は認められなかった (Mann-Whitneyの U 検定, $Z=1.25, 1.59, 1.00$, すべて $ns.$)。

本研究では, 友だちを5人まで具体的に挙げさせ, それぞれについて衡平性の認知とそれに伴う情動に関して評定させたので, 友だちの人数を5人以上挙げた127名(男子55名, 女子72名)を分析対象とした。これらの被験者の友だちの総数の中央値は8.11であり(男子9.67, 女子7.50), うち同性の友だちが6.29(男子7.00, 女子6.03), 異性の友だちが1.95(男子2.29, 女子1.79)であった。友だちの総数と同性の友だちの人数で, 男子のほうが女子よりも多い有意な傾向があったが ($Z=2.09, p=.037$; $Z=2.22, p=.026$), 異性の友だちについては男女差はなかった ($Z=1.49, ns.$)。

B. 個別的関係

不衡平値, 親密さイメージ, および交際期間

5人の人物との個別的関係について, 不衡平値, 親密さイメージ, および交際期間がどのようになっているか検討した。それぞれの測度について, 被験者の性(被験者間変数: 男子, 女子)と人物(被験者内変数: A, B, C, D, E)を独立変数とする分散分析を行った。条件別平均値と分散分析の結果を Table 1 および 2 に示す。

不衡平値については, 交互作用の傾向性がみられた。女子ではおおむね順位が下がるほど過大利得傾向があるが, 男子では最も高順位の人物とかなり過大利得な関係にある。親密さイメージでは, 有意な人物の主効果と性の主効果での傾向性が得られた。高順位の人物ほど親密なイメージがもたれ, 男子での親密さイメージも高かった。交際期間については, 何の有意な効果もなかった。

被験者の選別

Walster *et al.* (1978-c) の方法に従って, 個別的関係における不衡平値を算出し, この不衡平値の分布を考慮して, 過小利得群, 衡平利得群, 若干過大利得

Table 1

不衡平値，親密さイメージ，および交際期間に関する条件別平均値
—個別的関係—

		〈人物〉				
		A	B	C	D	E
不衡平値	男子	1.24	0.02	0.84	0.51	0.31
	女子	0.12	0.37	0.80	1.01	0.49
親密さイメージ	男子	3.42	2.93	3.00	2.55	2.42
	女子	3.38	2.89	2.58	2.40	2.03
交際期間（月数）	男子	39.35	40.18	27.15	33.58	31.73
	女子	33.53	33.31	33.26	31.44	33.58

男子： $N=55$ ； 女子： $N=72$

Table 2

不衡平値，親密さイメージ，および交際期間に関する分散分析の結果
—個別的関係—

	被験者の性 ^(a)	人物 ^(b)	被験者の性 × 人物
	$df=1/125$	$df=4/122$	$df=4/122$
不衡平値	$F=0.01$	$F= 1.26$	$F=2.20 p=.073$
親密さイメージ	$F=3.27 p=.073$	$F=34.04 p=.001$	$F=1.62$
交際期間	$F=0.20$	$F= 0.83$	$F=1.10$

(a)：被験者間変数； (b)：被験者内変数

群，および極端な過大利得群に被験者を分割した。その結果を Table 3 に示す。なお，本研究では，それぞれ，UB群，EQT群，SOB群，およびEOB群と略記する。以下の分析においては，この4群の比較によって，衡平理論の妥当性を検討する。

Table 3

不衡平値に基づく被験者の選別 — 個別的関係—

	—全体—		—男子—		—女子—	
	N	得点範囲 [中央値]	N	得点範囲 [中央値]	N	得点範囲 [中央値]
過小利得群 (UB群)	88	-32.25~-0.06 [-0.75]	52	-32.25~-0.06 [-1.00]	36	-12.25~-0.06 [-0.51]
衡平利得群 (EQT群)	306	0 [0]	125	0 [0]	181	0 [0]
若干過大利得群 (SOB群)	109	+0.11~+0.89 [+0.50]	39	+0.22~+0.78 [+0.50]	70	+0.11~+0.89 [+0.50]
極端な過大利得群 (EOB群)	132	+1.00~+27.00 [+2.00]	59	+1.00~+27.00 [+2.00]	73	+1.00~+15.00 [+2.00]

次に、当該の人物が他の4人と友だち関係にあるかについての評定に基づき、関係率を算出した。当該の人物が他の4人のうち友だち関係にある人数を4で割り100倍したものを関係率とした（中央値：全体37.71，男子39.94，女子36.00；男女差：*Mann-Whitney*の*U*検定， $Z=1.55$ ，*ns.*）。分布を考慮して、関係率が、0%，25%，50%，75・100%の者を、それぞれ、ゼロ関係率群，低関係率群，中関係率群，高関係率群とした。

衡平性の認知に伴う情動次元

12個の気分項目について因子分析（主因子法）を行った。固有値 ≥ 1.00 で因子数を決め、直交回転後の因子負荷量.400を基準として因子の解釈をした。男女別に因子分析を試みたところ類似した結果が得られ、最初の設定通りに3因子が抽出された。Table 4に男女全体の因子分析の結果を示す。第Ⅰ因子は“満足感”因子，第Ⅱ因子は“怒り”因子，第Ⅲ因子は“罪悪感”因子と命名できる。したがって、それぞれに該当する4項目の単純合計得点を各因子の得点とした（ α 係数：満足感.899；怒り.874；罪責感.800）。

なお、満足感と罪責感とは無関係であったが、満足感と怒り，怒りと罪責感とで、それぞれ有意な相関が得られた（*Pearson*の相関：満足感-怒り-.153，

Table 4

個別的関係における衡平性の認知に伴う情動に関する因子分析
の結果 (N=635) — 主因子法, 直交回転後の因子負荷量 —

	I	II	III	h^2
1. 腹立たしさ	-.115	.847	.103	.741
2. 申し分けなさ	.100	.048	.660	.448
3. 満足感	.827	-.088	.020	.691
4. 幸福感	.831	-.089	.064	.702
5. 怒り	-.036	.812	.092	.668
6. 罪悪感	.043	.128	.750	.581
7. 喜び	.854	-.076	.042	.737
8. いらだたしさ	-.046	.758	.182	.609
9. うしろめたさ	-.035	.169	.808	.682
10. 楽しさ	.804	-.029	-.026	.647
11. いきどおり	-.102	.715	.274	.597
12. やましさ	-.033	.276	.653	.503
因子寄与率(%)	23.3	21.7	18.4	63.4

$p=.001$; 満足感-罪責感 .047, *ns.*; 怒り-罪責感 .322, $p=.001$).

衡平性の認知と情動的状態

3つの情動について、被験者の性(男子, 女子), 関係率(ゼロ関係率群, 低関係率群, 中関係率群, 高関係率群), 衡平性(1次, 2次, 3次傾向)を独立変数とし, 親密さイメージを共変量とする共分散分析(一括投入型回帰的分析法)を行った。これらの結果を Table 5 および 6 に示す。各群での不衡平値の中央値を考慮して, 各衡平・不衡平群の間隔を(1,2,3,6)とした。なお, 交互作用が有意であるときには下位検定を行った ($df=1/602$)。

満足感で有意な親密さイメージの回帰効果がみられ, 怒りでも傾向性があったが, 罪責感については影響は認められなかった。

①怒り: 衡平性の1次傾向および2次傾向が有意であり, 3次傾向でも傾

Table 5

衡平性の認知に伴う情動に関する条件別平均値 — 個別的関係 —

N		〈 男子 〉				〈 女子 〉			
		UB	EQT	SOB	EOB	UB	EQT	SOB	EOB
	ゼロ関係率群	7	25	7	18	11	39	18	18
	低関係率群	15	34	10	14	10	51	17	22
	中関係率群	16	30	12	19	8	55	23	13
	高関係率群	14	36	10	8	7	36	12	20
怒り	ゼロ関係率群	6.00	6.32	5.29	6.17	8.45	4.92	5.56	5.50
		〈 5.99〉〈 6.35〉〈 5.38〉〈 6.10〉				〈 8.46〉〈 4.94〉〈 5.59〉〈 5.44〉			
	低関係率群	7.20	6.35	6.10	5.86	7.00	4.67	5.82	4.73
		〈 7.29〉〈 6.32〉〈 6.18〉〈 5.83〉				〈 6.89〉〈 4.64〉〈 5.75〉〈 4.65〉			
	中関係率群	6.75	5.13	4.58	6.37	6.25	5.09	5.39	6.23
		〈 6.88〉〈 5.12〉〈 4.72〉〈 6.30〉				〈 6.24〉〈 5.04〉〈 5.42〉〈 6.30〉			
	高関係率群	6.43	5.69	5.50	5.75	5.86	5.72	4.83	5.35
		〈 6.37〉〈 5.74〉〈 5.54〉〈 5.77〉				〈 5.76〉〈 5.73〉〈 4.86〉〈 5.27〉			
罪責感	ゼロ関係率群	4.86	5.76	7.86	7.28	4.73	4.95	6.67	7.00
		〈 4.86〉〈 5.76〉〈 7.86〉〈 7.28〉				〈 4.73〉〈 4.95〉〈 6.67〉〈 7.00〉			
	低関係率群	6.00	5.47	6.30	7.29	4.90	4.49	6.35	7.91
		〈 6.00〉〈 5.47〉〈 6.30〉〈 7.29〉				〈 4.90〉〈 4.49〉〈 6.35〉〈 7.91〉			
	中関係率群	5.94	4.97	5.50	6.47	5.63	4.62	6.17	7.00
		〈 5.94〉〈 4.97〉〈 5.50〉〈 6.47〉				〈 5.62〉〈 4.62〉〈 6.17〉〈 7.00〉			
	高関係率群	6.29	5.69	6.70	6.88	5.29	5.39	6.25	6.15
		〈 6.29〉〈 5.69〉〈 6.70〉〈 6.88〉				〈 5.29〉〈 5.39〉〈 6.25〉〈 6.15〉			
満足感	ゼロ関係率群	13.86	15.64	16.43	15.44	16.27	15.62	17.44	15.33
		〈 13.93〉〈 15.42〉〈 15.82〉〈 15.84〉				〈 16.23〉〈 15.54〉〈 17.25〉〈 15.73〉			
	低関係率群	14.13	14.12	17.40	15.43	14.00	15.86	15.18	16.77
		〈 13.55〉〈 14.31〉〈 16.90〉〈 15.59〉				〈 14.69〉〈 16.04〉〈 15.61〉〈 17.27〉			
	中関係率群	14.81	15.10	17.83	13.95	14.63	15.89	16.70	16.62
		〈 14.03〉〈 15.19〉〈 16.97〉〈 14.37〉				〈 14.66〉〈 16.21〉〈 16.54〉〈 16.17〉			
	高関係率群	16.07	15.31	17.30	16.13	15.71	15.72	17.42	16.55
		〈 16.40〉〈 15.04〉〈 17.04〉〈 16.01〉				〈 16.30〉〈 15.66〉〈 17.25〉〈 17.06〉			

〈 〉内： 調整値（親密さイメージによって調整）

向性がみられた。衡平仮説と一致して、他の群に比べ、UB群の怒りが高かった。また、性×衡平性の3次傾向の傾向性がみられ、女子でのみUB群の怒りが

Table 6

衡平性の認知に伴う情動に関する共分散分析の結果 一 個別関係一

	怒り	罪責感	満足感
回帰効果	$F=3.70$ $p=.055$	$F=0.00$	$F=134.90$ $p=.001$
性 ^(a)	$F= 1.70$	$F=2.60$	$F= 9.21$ $p=.003$
関係率 ^(b)	$F= 0.56$	$F=0.55$	$F= 2.57$ $p=.053$
衡平性 1次傾向 ^(a)	$F= 4.12$ $p=.043$	$F=33.13$ $p=.001$	$F= 8.11$ $p=.005$
2次傾向 ^(a)	$F=11.04$ $p=.001$	$F= 0.31$	$F=12.50$ $p=.001$
3次傾向 ^(a)	$F= 3.13$ $p=.077$	$F=12.94$ $p=.001$	$F= 5.48$ $p=.020$
性×関係率 ^(b)	$F= 1.12$	$F= 0.65$	$F= 0.17$
性×1次傾向 ^(a)	$F= 0.58$	$F= 1.36$	$F= 0.06$
性×2次傾向 ^(a)	$F= 0.10$	$F= 0.02$	$F= 2.05$
性×3次傾向 ^(a)	$F= 3.01$ $p=.083$	$F= 0.18$	$F= 1.16$
関係率×1次傾向 ^(b)	$F= 1.33$	$F= 1.52$	$F= 1.50$
関係率×2次傾向 ^(b)	$F= 0.61$	$F= 1.89$	$F= 1.27$
関係率×3次傾向 ^(b)	$F= 0.94$	$F= 0.08$	$F= 1.42$
性×関係率×1次傾向 ^(b)	$F= 0.68$	$F= 0.49$	$F= 1.04$
性×関係率×2次傾向 ^(b)	$F= 0.84$	$F= 0.36$	$F= 0.52$
性×関係率×3次傾向 ^(b)	$F= 1.72$	$F= 0.24$	$F= 2.47$ $p=.061$

(a) : $df=1/602$; (b) : $df=3/602$

共変量： 関係の親密さイメージ

4群の間隔： 不等間隔 (1,2,3,6)

高い3次傾向があった ($F=12.02, p=.001$)。

②罪責感： 衡平性の1次および3次傾向が有意であり，衡平仮説に一致して，過大利得2群の罪責感が高かった。

③満足感： 性の有意な主効果および関係率での主効果の傾向性が得られ，男子よりも女子のほうが，他の関係率群に比べ高関係率群のほうが，それぞれ満足感が高い傾向があった。衡平性の1次，2次，および3次傾向の主効果がすべて有意であり，過大利得2群の満足感が高い傾向がみられた。性×関係率

× 3 次傾向の交互作用で傾向性があり，男子の低関係率群と高関係率群とで有意な 3 次傾向がみられた ($F=7.01, p=.008; F=5.00, p=.026$)。低関係率群では SOB 群を頂点とする逆 U 字型を示し，高関係率群では UB 群と SOB 群の満足感が高い複雑なパターンが現われた。

C. ネットワーク全体

被験者の選別

友人関係全体での衡平性の査定に基づき，個別の関係と同様な方法で不衡平値を算出した。この不衡平値の分布を考慮して，過小利得群，衡平利得群，若干過大利得群，および極端な過大利得群に被験者を分割した。その結果を Table 7 に示す。なお，個別の関係と同様に，それぞれ，UB 群，EQT 群，SOB 群，および EOB 群と略記する。過小利得な関係の出現は少数であったので，UB 群を除く 3 群の比較によって，衡平理論の妥当性を検討する。

Table 7
不衡平値に基づく被験者の選別 — ネットワーク全体 —

	— 男子 —		— 女子 —	
	N	得点範囲 [中央値]	N	得点範囲 [中央値]
過小利得群 (UB 群)	6	-1.50~-0.17 [-0.56]	3	-1.50~-0.50 [-1.00]
衡平利得群 (EQT 群)	21	0 [0]	32	0 [0]
若干過大利得群 (SOB 群)	12	+0.33~+0.78 [+0.49]	18	+0.25~+0.56 [+0.35]
極端な過大利得群 (EOB 群)	16	+1.00~+15.00 [+1.38]	19	+0.67~+11.00 [+1.24]

次に，当該の人物が他の 4 人と友だち関係にあるかについての評定に基づいて，ネットワーク密度を算出した。ネットワーク密度とは社会的ネットワーク研究で用いられている測度である (Hirsch, 1980)。本研究では，ネットワーク内の友だち関係にある個数を 10 で割り 100 倍したものをネットワーク密度とした (中央値：全体 35.60，男子 37.08，女子 34.38；男女差：Mann-Whitney の U 検定， $Z=0.74, ns.$)。ネットワーク密度が 0 ~ 30% の者を低密度群，40 ~

100%の者を高密度群とした。

なお、自分のネットワーク全体に対する親密さイメージは、ほぼ中性的であった（平均値：全体2.73，男子2.85，女子2.64；男女差： $t_{(125)}=1.46$ ，*ns.*）。

衡平性の認知に伴う情動次元

12個の気分項目について個別的関係と同様な方法で因子分析（主因子法）を行った。男女別に因子分析を試みたところ、Table 8に示すように、男女ともに3因子が抽出されたが、代表因子が男女で少し異なっていた。男子では、第Ⅰ因子は“満足感”因子、第Ⅱ因子は“罪責感”因子、第Ⅲ因子は“怒り”因子、女子では、第Ⅰ因子は“罪責感”、第Ⅱ因子は“満足感”、第Ⅲ因子は“怒り”と命名できる。満足感因子については男女ともに最初の設定通りの4項目が代表項目となった。しかし、男子では、いらだたしさといきどおりが、女子では怒りといきどおりが、怒り因子と罪責感因子とに重複していた。したがって、満足感因子と罪責感因子では、最初に設定した4項目の単純合計得点を因子得点としたが、怒り因子については、男子では腹立たしさと怒り、女子では腹立たしさといらだたしきの、合計得点を怒り因子得点とした（ α 係数：満足感：男子 .928，女子 .881；怒り：.733，.777；罪責感：.821，.853）。

なお、男女ともに、満足感と他の2つの情動とは無関係であったが、怒りと罪責感との間には有意な正の相関が得られた（Pearsonの相関：満足感－怒り：男子 .071，女子 -.188；満足感－罪責感：それぞれ，.114，-.022，*ns.*；怒り－罪責感：それぞれ，.494， $p=.001$ ，.315， $p=.007$ ）。

衡平性の認知と情動的状态

因子分析の結果に男女差があったので、3つの情動について、男女別に、ネットワーク密度（低密度群，高密度群）、衡平性（1次，2次傾向）を独立変数とし、親密さイメージを共変量とする共分散分析（一括投入型回帰的分析法）を行った。これらの結果をTable 9および10に示す。各群での不衡平値の中央値を考慮して、各衡平・不衡平群の間隔を男子では（1,2,4），女子では（1,2,5）とした。なお、交互作用が有意であるときには下位検定を行った（男子， $df=1/42$ ；女子， $df=1/62$ ）。

男子ではいずれの情動でも親密さイメージの影響は認められなかったが、女子では、怒りで有意な回帰効果がみられ、満足感でも傾向性があった。

(1)男子

①怒り： 衡平性の2次傾向のみが有意であったが、衡平仮説に反して、

Table 8

ネットワーク全体における衡平性の認知に伴う情動に関する因子分析の結果
 —主因子法, 直交回転後の因子負荷量—

	〈 男子, N=55 〉				〈 女子, N=72 〉			
	I	II	III	h^2	I	II	III	h^2
1. 腹立たしさ	.018	.139	.969	.959	.023	-.076	.855	.738
2. 申し分けなさ	.094	.719	.299	.616	.661	.136	.121	.471
3. 満足感	.869	.044	.117	.771	-.005	.791	-.189	.661
4. 幸福感	.863	.063	.046	.750	.015	.912	-.152	.855
5. 怒り	.044	.358	.523	.404	.426	-.128	.605	.564
6. 罪悪感	.050	.778	.046	.610	.896	-.128	.146	.841
7. 喜び	.894	.025	.037	.802	.111	.837	.032	.713
8. いらだたしさ	.003	.441	.609	.565	.264	-.114	.710	.587
9. うしろめたさ	.019	.697	.280	.564	.736	.034	.287	.626
10. 楽しさ	.873	.050	-.109	.777	-.180	.707	-.014	.533
11. いきどおり	.038	.537	.574	.619	.464	-.017	.481	.446
12. やましさ	.031	.674	.261	.523	.908	-.129	.133	.858
因子寄与率(%)	25.7	22.5	18.2	66.4	26.0	22.9	16.9	65.8

SOB群を頂点とする逆U字型傾向を示した。

②罪責感： 衡平性の2次傾向が有意であり、ネットワーク密度×衡平性の2次傾向でも傾向性がみられた。高密度群でのみSOB群を頂点とする逆U字型傾向を示していた ($F=12.42, p=.001$)。

③満足感： ネットワーク密度の有意な主効果とネットワーク密度×衡平性の1次傾向での傾向性が得られた。前者は、高密度群での満足感が高いことを示していた。後者の交互作用は、利得最大原理と一致し、低密度群でのみEOB群の満足感が高い1次傾向があることを示していた ($F=2.92, p=.095$)。

(2)女子

①怒り： 衡平性の1次傾向で傾向性がみられ、衡平仮説に反して、EOB群の怒りが最も高かった。

②罪責感： 衡平仮説に一致して、EOB群の罪責感が最も高いことを示す衡平性の1次傾向のみが有意であった。

Table 9

衡平性の認知に伴う情動に関する条件別平均値 — ネットワーク全体 —

N		〈 男子 〉			〈 女子 〉		
		EQT	SOB	EOB	EQT	SOB	EOB
	低密度	11	4	7	12	11	12
	高密度	10	8	9	20	7	7
怒り	低密度	2.55	4.00	2.86	2.50	2.36	3.33
		〈 2.53 〉	〈 3.95 〉	〈 2.79 〉	〈 2.50 〉	〈 2.40 〉	〈 3.07 〉
	高密度	2.20	3.13	3.11	2.85	3.00	3.14
		〈 2.24 〉	〈 3.25 〉	〈 3.08 〉	〈 2.72 〉	〈 3.18 〉	〈 3.32 〉
罪責感	低密度	5.19	6.00	6.29	4.67	5.45	7.25
		〈 5.11 〉	〈 5.78 〉	〈 6.01 〉	〈 4.67 〉	〈 5.45 〉	〈 7.29 〉
	高密度	4.40	8.50	6.33	4.70	4.43	7.14
		〈 4.57 〉	〈 9.02 〉	〈 6.22 〉	〈 4.72 〉	〈 4.40 〉	〈 7.12 〉
満足感	低密度	14.55	13.25	16.29	17.92	17.45	16.83
		〈 14.60 〉	〈 13.43 〉	〈 16.50 〉	〈 17.91 〉	〈 17.41 〉	〈 17.21 〉
	高密度	17.90	17.88	16.44	16.75	17.86	20.00
		〈 17.77 〉	〈 17.47 〉	〈 16.53 〉	〈 16.94 〉	〈 17.60 〉	〈 19.74 〉

〈 〉内： 調整値（親密さイメージによって調整）

③満足感： ネットワーク密度×1次傾向の交互作用が有意であった。高密度群でのみ、利得最大原理と一致し、過大利得になるほど満足感が高まる1次傾向がみられた ($F=7.05$, $p=.010$)。

D. 衡平性と平等性

衡平性と平等性との重複について検討した。

①個別の関係： 衡平性と平等性との重複率は、81.9%であった（衡平—平等286ケース，不衡平—不平等234ケース，衡平—不平等20ケース，不衡平—平等95ケース，ただし不衡平—不平等のうち10ケースは利得の方向が逆である）。男女別の重複率には差がみられなかった（男子79.6%：衡平—平等113ケース，不衡平—不平等106ケース，衡平—不平等12ケース，不衡平—平等44ケース，ただし不衡平—不平等のうち6ケースは利得の方向が逆である；女子83.6%：衡平—平等173ケース，不衡平—不平等128ケース，衡平—不平等8ケース，不衡平—平等51ケース，ただし不衡平—不平等のうち4ケースは利得の方向が逆で

Table 10

衡平性の認知に伴う情動に関する共分散分析の結果 —ネットワーク全体—

	怒り	罪責感	満足感
【 男子, 不等間隔(1,2,4), すべて$df=1/42$ 】			
回帰効果	$F= 0.57$	$F= 1.96$	$F= 0.90$
ネットワーク密度	$F= 0.41$	$F= 1.49$	$F= 6.82$ $p=.012$
衡平性 1次傾向	$F= 0.75$	$F= 0.93$	$F= 0.27$
2次傾向	$F= 6.83$ $p=.012$	$F= 5.94$ $p=.019$	$F= 0.70$
密度×1次傾向	$F= 0.89$	$F= 0.00$	$F= 3.34$ $p=.075$
密度×2次傾向	$F= 0.57$	$F= 3.98$ $p=.053$	$F= 0.87$
【 女子, 不等間隔(1,2,5), すべて$df=1/62$ 】			
回帰効果	$F= 6.99$ $p=.010$	$F= 0.03$	$F= 3.59$ $p=.063$
ネットワーク密度	$F= 2.14$	$F= 0.39$	$F= 1.02$
衡平性 1次傾向	$F= 3.11$ $p=.083$	$F=13.63$ $p=.001$	$F= 2.79$
2次傾向	$F= 0.01$	$F= 0.33$	$F= 0.09$
密度×1次傾向	$F= 0.04$	$F= 0.00$	$F= 6.06$ $p=.017$
密度×2次傾向	$F= 0.82$	$F= 0.60$	$F= 0.05$

ある；男女差： $\chi^2_{(1)}=1.66$, $ns.$)。不衡平値と不平等値との間にも高い相関があった (*Spearman* の順位相関：全体 .729, 男子.737, 女子.724, いずれも $p=.001$)。

次に、衡平分配および平等分配の出現率をみると、全体では衡平48.1%、平等60.0%、男子では45.5%、57.1%、女子では50.3%、62.2%であり、男女差は認められなかった ($\chi^2_{(1)}=1.45$, 1.71, いずれも $ns.$)。衡平分配と平等分配との同時出現率は、全体では45.0%、男子では41.1%、女子では48.1%であり、女子のほうが高い傾向性がみられた ($\chi^2_{(1)}=3.06$, $p=.081$)。

②ネットワーク全体： 衡平性と平等性との重複率は、86.6%であった (衡平—平等51ケース、不衡平—不平等59ケース、衡平—不平等2ケース、不衡平—平等15ケース、ただし不衡平—不平等のうち2ケースは利得の方向が逆である)。男女の重複率はほぼ同じであった (男子85.5%：衡平—平等21ケース、不衡平—不平等26ケース、衡平—不平等0ケース、不衡平—平等8ケース、ただし不衡平—不平等のうち2ケースは利得の方向が逆である；女子87.5%：衡平

一平等30ケース，不衡平—不平等33ケース，衡平—不平等2ケース，不衡平—平等7ケース；重複率の性差： $\chi^2_{df}=0.11$, *ns.*）。不衡平値と不平等値との間にも高い相関があった（*Spearman* の順位相関：全体.743，男子.711，女子.782，いずれも $p=.001$ ）。

次に，衡平分配および平等分配の出現率をみると，全体では衡平41.7%，平等52.0%，男子では38.2%，52.7%，女子では44.4%，51.4%であり，男女差は認められなかった（ $\chi^2_{df}=0.50$, 0.02, いずれも*ns.*）。衡平分配と平等分配との同時出現率は，全体では40.2%，男子では38.2%，女子では41.7%であり，男女差はなかった（ $\chi^2_{df}=0.16$, *ns.*）。

考 察

衡平性の認知に伴う情動次元

気分項目に関する因子分析の結果は，個人的関係のみならずネットワーク全体においても，衡平性の認知に伴う情動が，満足感，怒り，および罪責感の3因子から成ることを示した。これは，Homans (1974) の提起と一致するとともに諸井 (1989) が得た結果とも一致する。

しかし，個別的关系では各因子で最初に設定した項目のみが高い因子負荷量を示したが，ネットワーク全体の場合には男女ともに怒り項目のうち2項目の因子負荷量が罪責感因子でも高かった。ネットワーク全体と自己との関係における衡平性の認知は，個別的关系の場合に比べ，過大利得方向への偏りがみられた。したがって，過小利得状態に特徴的な情動である怒りが顕在化しなかったために，このような結果になったと思われる。

また，諸井 (1989) の研究では，1) 満足感と他の2つの情動とは無関係であるのに，怒りと罪責感との間に有意な正の相関がみられる，2) 衡平仮説に反して，罪責感が過小利得者で，怒りが過大利得者で，それぞれ少し高まる傾向が認められる，という興味深い結果が認められた。本研究においても，1) については，個人的関係で満足感と怒りとの間に弱い正の関係がみられた以外は，同様な傾向が得られた。また，2) についてもネットワーク全体との関係で男女ともに怒りについて衡平仮説と逆の傾向があった。過大利得状態にせよ相手を不衡平な状態に陥らせたことに対して，過小利得者が罪責感を感じる可能性もある。また，自己が過大利得状態にあるにせよ，不衡平状態に陥らせた相手に対して，過大利得者が怒りを感じることもある。つまり，1) 情動がだれに向けら

れたものかという情動の方向性や2) 存在する不衡平に関する原因帰属によって、怒りと罪責感が併存することもあると思われる。たとえば、自己の過大利得状態を自己の責任に帰属すると、相手に対する罪責感とともに自己に対する怒りが生じるだろう。したがって、2者関係の継続・終結への動機づけの観点とともに(諸井, 1989), 1) および2) の視点を含めて、衡平性の認知に伴う情動を把握すべきである。

衡平性の認知と社会的ネットワーク

本研究では、Austin & Walster (1974, 1975) が提起した世界に対する衡平性仮説を、友人関係における衡平性に適用した。

個別的関係での衡平性の認知と情動的状态との関係については、当該の友だちが他の友だちとつきあいをもっているほど、つまり、関係率が高いほど、当該の友だちと自己との関係における両者の関係が曖昧になると予測した。関係率に関連した効果は満足感のみでみられた。当該の友だちが他の友だちともつきあっているほど、高い満足感があるのに加えて、男子では関係率の高低によって衡平性の認知と情動的状态との関係が異なる傾向が認められた。低関係率群と高関係率群ともに少し過大利得な状態が最も高い満足感をもたらすが、高関係率群では衡平利得群の満足感が最も低かった。

ネットワーク全体と自己との関係における衡平性の認知と情動的状态との関係については、ネットワークでの関係密度が高いほど、両者の関係が衡平理論と一致すると予測した。罪責感と満足感でネットワーク密度に関連した効果がみられた。罪責感については、男子の高密度群で、少し過大利得な状態が最も高い罪責感をもたらす傾向があった。これは、世界に対する衡平性仮説と一致する。満足感では、さらに特徴的な性差がみられた。男子では、ネットワーク密度が高いと満足感も高かった。男女ともに、ネットワーク密度と衡平性の1次傾向の交互作用がみられたが、対照的な傾向を示した。過大利得になるほど満足感が高まる傾向が、男子では低密度群でみられたのに対して、女子では高密度群で認められた。

このように、本研究では、男子の高密度群の罪責感を除き、個別的関係、ネットワーク全体のいずれにおいても、世界に対する衡平性の仮説に基づく予測に一致する傾向があまり認められなかった。しかしながら、次のような解釈が可能であろう。

男子では、自己の営む友人ネットワークが低密度状態にあるときに、ネットワーク全体からかなりの過大利得を得ている者の満足感が高い。個別的関係に

において衡平利得状態が満足感をもたらさなかったことと合わせて考えると、友だち相互のつながりの希薄さが利得最大原理への依存を促進するといえよう。

一方、女子では、男子と逆に、友人ネットワークが高密度状態にあるときに、ネットワーク全体からかなりの過大利得を得ている者の満足感が高かった。これは、女子では、単なる“収支”としての過大利得でなく、友だち相互の緊密なつながりをもたらす利得が満足感を生じるといえる。

ところで、本研究では、友人数を5人に限定した。これは、1) 友人数に関する予備調査の結果と2) 査定の反復によるネガティブな効果の排除のためであるが、友人ネットワークの大きさの効果から本結果の一般性を限定したことになる。さらに、サンプルの大きさを考慮して、友だちの性を無視したが、先行研究で同性と異性の友だちでは異なる傾向がみられている（諸井・小川，1987）。したがって、今後の研究では、ネットワークの大きさや友だちの性の効果を含めた検討を行うべきであろう。

衡平性の認知

“最も親しい友だち”という基準を用いた先行研究においても（諸井・小川，1987；諸井，1989），過小利得者が少数しか出現しなかったが、本研究でも同様な傾向が認められた。この傾向に関して、諸井（1989）は、1) 関係終結に伴うコストの小ささ、2) 衡平性の認知の非対称性、という点から解釈している。ネットワーク全体との関係では、自己にとって過小利得な関係を断つことによって、自己の営む関係から全体としての利得を高めようとする利得最大原理に基づく傾向がうかがえる。しかし、個別的关系をみると、男子では最も親しい友だち（人物A）との関係において最大の過大利得な状態にあるが、女子ではそのような傾向はない。したがって、男子では、利得最大原理の観点から交友を営んでいるといえよう。

衡平性と平等性との重複に関しては、先行研究と同様に（諸井・小川，1987；諸井，1989），重複率、相関値のいずれにおいても高かった。諸井（1989）の研究では、衡平分分配と平等分配の同時出現率が男子よりも女子で高い傾向が認められた。本研究では、個人的関係の場合に同様な傾向があったが、ネットワーク全体では性差はなかった。したがって、個別的关系についてであるが、アウトカムのみでなくインプットの平等化をも伴う平等性志向が女子で再び認められたことになる。

ところで、過小利得者の出現の少なさについては、諸井（未発表データ）は、夫婦関係では過小利得者が過大利得者と同程度に生じることを確かめてい

る（妻の認知： 過小利得者51名， 衡平利得者47名， 過大利得者46名）。したがって，先述の諸井(1989)の関係終結に伴うコストの大きさという解釈は，一応妥当といえよう。今後は，関係の性質による衡平・不衡平状態の出現率の変化を検討すべきであろう。また，衡平性と平等性の重複についても，Walster *et al.* (1978-b)の衡平式の妥当性も含め（諸井・小川，1987），衡平性の査定方法の検討をする必要があるかもしれない。

衡平原理と利得最大原理

本研究では，個別の関係では怒りと罪責感，ネットワーク全体では女子の罪責感で，それぞれ衡平仮説と一致する傾向が認められた。興味深いことに，衡平利得状態に特徴的な情動である満足感について衡平仮説よりも利得最大原理と一致する傾向が現われた。Cate, Lloyd, Henton, & Larson (1982) および Michaels, Edwards, & Acock (1984) は，大学生の恋愛関係において，衡平性，平等性，および報酬水準（Foa(1971)による6種の対人的資源に性を加えたもの）のTMIに対する相対的規定力を比較した。いずれも，報酬水準がTMIの最も有力な予測子であった。また，Cate, Lloyd, & Henton (1985) は，恋愛関係を用い，衡平性，平等性，および報酬水準の3・7カ月後の関係終結の予測力を調べた。この場合も，報酬水準が有意な予測子であった。これらの研究は，衡平原理よりも利得最大原理が対人関係を支配する有力な規定因であることを示しているといえよう。

ところで，Rusbult (1980-a) は，衡平理論と対照的に利得最大化傾向を基本に据える社会的交換理論を精緻化し，次に示す投資モデルを提起している。

$$SAT_x = O_x - CL$$

$$\left\{ \begin{array}{ll} SAT_x & : \text{関係Xに対する満足感} \\ O_x & : \text{関係Xがもたらすアウトカム} \\ CL & : \text{その人が一般的に抱いている比較水準} \end{array} \right.$$

$$COM_x = O_x + I_x - O_y$$

$$\left\{ \begin{array}{ll} COM_x & : \text{関係Xへのコミットメント} \\ I_x & : \text{関係Xに投資された資源} \\ O_y & : \text{関係Xに代わり得る関係Yがもたらす可能性のあるアウトカム} \end{array} \right.$$

この投資モデルは，恋愛関係（Rusbult, 1980-a）や友人関係（Rusbult, 1980-b）をはじめ，さまざまな対人領域でその妥当性が実証されている。

Cate *et al.* (1982) などの研究は，衡平性の説明力が劣っていることを示して

いる反面、代わり得るモデルを呈示していない。その点、投資モデルは精緻化されたモデルといえるが、社会的比較に基づく公正さを根幹とする衡平理論との関わりが検討されていない。たとえば、Sabatelli & Cecil-Pigo (1985) は、夫婦関係においてコミットメント(COMx)が衡平性によっても十分に規定されていることを示した。Sprecher (1988) も、コミットメント(COMx)の有力な規定因が関係満足(SATx)と代替者の魅力(Oy)であることに認めたが、社会的支持(まわりの者による交際に対する賛成・反対)に加え、衡平性も弱いが有意な規定因であった。したがって、衡平理論の視点も含めて、投資モデルに代表される利得最大化モデルの検討にも、今後、取り組む必要があろう。

〈付記〉

- 1) 本論文での調査は、筆者の下で、伊藤恭代嬢、岩瀬由起子嬢(社会学科昭和62年度卒業)が卒業論文研究のために計画・実施した。
- 2) 本研究の統計的処理にあたっては、名古屋大学大型計算機センターのSPSS 統計パッケージ(7-9版)を利用した。なお、共分散分析は、MANOVAサブプログラムによった。

引用文献

- Adams, J.S. 1965 Inequity in social exchange. *Advances in Experimental Social Psychology*, 2, 267-299.
- Austin, W., & Walster, E. 1974 Participants' reactions to "Equity with the world." *Journal of Experimental Social Psychology*, 10, 528-548.
- Austin, W., & Walster, E. 1975 Equity with the world: The trans-relational effects of equity and inequity. *Sociometry*, 38, 474-496.
- Cate, R.M., Lloyd, S.A., & Henton, J.M. 1985 The effect of equity, equality, and reward level on the stability of students' premarital relationships. *Journal of Social Psychology*, 125, 715-721.
- Cate, R.M., Lloyd, S.A., Henton, J.M., & Larson, J.H. 1982 Fairness and reward level as predictors of relationship satisfaction. *Social Psychology Quarterly*, 45, 177-181.
- Foa, U.G. 1971 Interpersonal and economic resources. *Science*, 171, 345-351.
- Hirsch, B.J. 1980 Natural support systems and coping with major life

- changes. *American Journal of Community Psychology*, 8, 159-172.
- Homans,G.C. 1974 Social behavior: Its elementary forms. Harcourt Brace Jovanovich.(社会行動—その基本形態— 橋本 茂訳 誠信書房 1978)
- 井上和子 1985 恋愛関係におけるEquity 理論の検証 実験社会心理学研究, 24, 127-134.
- Michaels,J.W., Edwards,J.N., & Acock,A.C. 1984 Satisfaction in intimate relationships as a function of inequality, inequity, and outcomes. *Social Psychology Quarterly*, 47, 347-357.
- 諸井克英 1989 対人関係への衡平理論の適用(2) —同性親友との関係における衡平性と情動的状态— 実験社会心理学研究, 28, 131-141.
- 諸井克英・小川久美 1987 対人関係への衡平理論の適用 —予備的検討— 人文論集 (静岡大学人文学部社会学科・人文学科研究報告), 37,15-40.
- Rusbult,C.E. 1980-a Commitment and satisfaction in romantic associations: A test of the investment model. *Journal of Experimental Social Psychology*,16, 172-186.
- Rusbult,C.E. 1980-b Satisfaction and commitment in friendships. *Representative Research in Social Psychology*, 11, 96-105.
- Sabatelli,R.M., & Cecil-Pigo,E.F. 1985 Relational interdependence and commitment in marriage. *Journal of Marriage and the Family*, 47, 931-937.
- Sprecher,S. 1988 Investment model, equity, and social support determinants of relationship commitment. *Social Psychology Quarterly*, 51, 318-328.
- Walster,E., Traupmann,J., & Walster,G.W. 1978-a Equity and extramarital sexuality. *Archives of Sexual Behavior*, 7, 127-142.
- Walster,E., Walster,G.W., & Berscheid,E. 1978-b *Equity: Theory and research*. Allyn and Bacon.
- Walster,E., Walster,G.W. & Traupmann,J. 1978-c Equity and premarital sex. *Journal of Personality and Social Psychology*, 36, 82-92.